二〇〇二年CD-R画集「凝眸」表紙（台湾東販出版刊）

従姉妹　その3

彼女があんなに勉強ができるとは知りませんでした。台湾のトップと言われる台湾大学に合格したんです。しかも難関の学部で、嬉しいし、敬服もしました。

入学のために写真が必要だと聞き、私にまかせてと張りきって、さっそくベランタで撮影しました。撮るだけは撮りましたが、いつものようにあとでプリントをしようと思っていたら、たちまち時間がたってしまいました。彼女は三、四日毎に催促の電話をかけてきました。私はそのたびに「あー忘れた。あとでプリントしに行くから、安心して！」と答えていました。

あっという間に、入学の日が目の前に来ました。もう三ヶ月もたったとは！　本当に時間がたつのは早いと感心しました。入学の前夜が来て、こんどは彼女も心配で飛んできました。いつもの通りに慰めて、「あとで一緒にプリントしにいこうね。そうそう、今日はおいしい寿司屋さんでごちそうするから」と、わざと話題を移して、自分の過ちを誤摩化していました。

私たち二人はシャッターを下ろしている写真屋さんの前に立っていました。そうか、今日は日曜日だったんだ。お店はやっているはずないわよね、って内心で納得して呟きました。

でも、外見はまだ小学生にも見える大学一年生の従姉妹は、その場で泣き出しはじめました。「大丈夫よ。あさって出せば大丈夫よ…」彼女は大きな声で、「明日じゃないと駄目なの！」と叫びました。

それから、時間をかけて彼女を慰め、「あしたの朝、一番にプリントして学校へ持っていくから安心して！」と言いました。

翌日、よく出来ている、めちゃくちゃ可愛い写真と撮影道具を持って、大学の門の前で彼女と待ち合わせをしました。やってきたのは、目がまるで胡桃みたいに腫れて、目隠しのすっごく変な眼鏡をかけている彼女でした。

彼女を見て私はくすくす笑いました。

彼女は私を睨んで、「あなたのせいよ。きょうはもう誰にも会えないじゃない」と言いました。

彼女が受付係の先生に写真を出すと、先生は顔を伏せたまま写真を受け取り、

「わー、奇麗な子ですね」と感嘆の声を上げました。

そのあと、顔を上げて目の前の彼女を見ると、眉をひそめて疑いの目つきで、「これは…、本当にあなたの写真ですか？」と尋ねました。

彼女はまた泣きそうな声で「私です」って答えました。

二〇〇二年月刊「談星」表紙（台灣尖端出版刊）

Sweet Days スイート・デイズ

美君ちゃん　その1

最初に知り合ったのは彼女のお兄さんです。
スタジオの隣にコンピューターのお店があります。ここにはマック専門のコーナーがあり、少しでも暇があると平凡は新商品が入っていないか覗いています。

ある日、平凡と私が階段を上って二階のマックコーナーに行こうとしていると、たまたま彼女のお兄さんとすれ違いました。すごくカッコよかったので、平凡に声をかけてよと言いましたが、彼はもちろん実行しませんでした。
その後、マックのコーナーでまた彼を見かけたとき、店長さんが彼を紹介してくれました。
平凡と同じ専門学校の後輩でした。

「紅色」のモデルを探しているときでしたので、いい男のまわりには可愛い女の子もいっぱいいると思って、彼に「まわりにいる一番可愛い子を紹介して」とお願いしました。
「うちの妹が一番可愛いですよ」って言って紹介してもらったのが、美君ちゃんです。

Nepenthes aristolochioides

二〇〇四年台湾の小説表紙（台湾狗屋出版社）

二〇〇四年台湾の小説表紙（台湾禾馬出版社）

二〇〇四年台湾の小説表紙（台湾禾馬出版社）

美君ちゃん　その2

細くて背が高い。幼い感じなのに、少し色っぽい。
はじめて会ったときは十五歳前で、目も顔も声も子供っぽさが残っていました。でも、子供でいながら美人という感じでした。

彼女の写真を撮りはじめたら止まらなくなって、自分でも信じられないくらいの枚数を撮りました。明らかに必要以上の時間をかけました。内心、彼女を帰したくないと思っていたのかもしれません。

高校の夏休みにコンビニでアルバイトしたことがあります。一日四時間ですが、ほとんどの時間は裏で休んでいました。

彼女もそこで働いていました。そして一緒に外に出たことが何回もありました。
でも、私が少しそばを離れると、必ず男の人が声をかけてきます。一番ひどいのは、本屋さんでカップルの男の子がずっと彼女を見ていたときのことです。
そのカップルは、女の人が腹を立ててそこで大喧嘩をはじめてしまいました。

美人はやはり誰かに守られなきゃいけませんよね。
美人ってやっぱり危険なんだなー、とそのとき気がつきました。
私は経験者でないので、知らない世界なんですけど…。

二〇〇三年台湾の小説表紙（台湾狗屋出版社）

二〇〇二年台湾の小説表紙（台湾狗屋出版社）

花好夕月

二〇〇三年台湾の小説表紙（台湾狗屋出版社）

Sweet Days スイート・デイズ

初出　一九九七年ストーリーブック「藍色」（台湾尖端出版刊）　二〇〇四年リメイク

親友になった彼女

出版社に勤める学校時代の友人から、すごく美人でタレントさんみたいな新人が入社したと聞きました。ある日、原稿を渡しに出版社に行ったとき、友人がガラス張りのパネル越しに、頭を伏せて静かに仕事をしている女性をあごで指しました。

「彼女だよ」

私はすぐに彼が言っていることを理解しました。

でも、髪が長かったので、うつむいている彼女の顔は見ることができませんでした。見えたのは細くて長い指だけでした。

帰りがけ、もう少し顔を見てみたいと思い、こっそり彼女に近づきました。ちょうどそのとき、外から帰ってきた二人の若い女の子が私を見て、「キャー」と声をあげました。「あー、陳淑芬さんだ」「先生の絵が大好き…」私に駆け寄ってきました。静かな編集部が急に騒がしくなりました。と突然、後ろで「パン！」とデスクを叩く音がして、まわりが急にシーンとなりました。振り向くと、彼女がヘッドフォンを取り外して、クールな声で「原稿の執筆中。静かにしてもらえますか」と言ったのです。そのときはじめて彼女の顔を見たのですが、第一印象は、「ワー目がでかい！」というものでした。怖い美人だと思い、みなとそろって外に逃げました。

その後、仲のいい友達になり、あのときの出来事は笑いのネタになりました。

初出　一九九七年ストーリーブック「藍色」（台湾尖端出版刊）　二〇〇四年リメイク

初出　一九九七年ストーリーブック「藍色」（台灣尖端出版刊）

縁

確かに「縁」は存在すると思います。
はじめて彼女に会ったのは、サイン会の会場でした。
その日のサイン会は何だか可愛い子が多いと思いました。美少女大会のようです。

次々にサインテーブルの前に来て私がサインをするのですが、彼女たちが目の前にいるのは一瞬で、このとき何か会話をしないとチャンスを逃してしまいます。大胆に話しかけて相手の電話番号を教えてもらうことも多いのですが、たまにどこかから湧いてきた羞恥心で、なかなか聞けないこともありました。

その日、たまたま私の会話システムが故障したみたいで、数人の可愛い子が目の前からみるみる消えてしまいました。心の中では「連絡先を教えて！」と叫んでいるんだけれど、実際には美少女たちが去っていくところをただ見ているだけ。

翌日、同じ会場でまたサイン会を行いました。めずらしく早めに会場に着いた私がボーッとしていると、昨日見逃した可愛い子が会場にいるのを発見！　ハーフのような顔つきの彼女はちょっと目立ちます。今度は考えるよりも早く、彼女に声をかけに行きました。もちろん、彼女は私のことを覚えていて、早速連絡先を教えてもらいました。その後、彼女とはずいぶん年の離れた友達になりました。

私は、いつも「あなたはまだ十五歳よ。世の中には悪い人がたくさんいるから、簡単に他人を信じちゃ駄目よ。知らない人に電話番号とかあげちゃ駄目。相手が先生という人でもね」と彼女に説教します。もちろん、私は例外、例外ですよ！。

二〇〇二年台湾の小説表紙（台湾禾馬出版社）二〇〇四年版画化

二〇〇四年台湾の小説表紙（台湾狗屋出版社）

二〇〇二年台湾の小説表紙（台湾禾馬出版社）

二〇〇三年月刊「談星」表紙（台湾未発出版刊）

（台灣米雪出版社）2002年月刊「雪兒」封面

二〇〇三年月刊「談星」表紙（台湾尖端出版刊）

二〇〇四年台湾の小説表紙（台湾禾馬出版社）